

■公益信託タカラ・ハーモニストファンド 2026年度(第41回)助成先

|      | 助成先<br>代表者名                    | 助成額<br>活動地域   | テーマ<br>活動・研究の内容、目的、助成金の用途等   |
|------|--------------------------------|---------------|--|
| 活動の部 | 高知に自然史博物館をつくる会<br>谷地森 秀二       | 50万円<br>高知県   | <b>高知県に現存する生物標本の一時保管場所の整備活動</b><br>高知県には様々な県内産の生物標本が存在する。これらは南四国の自然を理解するために重要な資料であり、採集当時の自然環境の証拠である。今後県外に流出したり、消失したりした場合には、再び入手することは不可能である。だが、現状の保管状況は芳しくなく、その多くが個人の努力と工夫によって支えられており、今後どの程度の期間維持できるかわからないものが多い。これらの貴重な生物標本の散逸や県外流失を防ぐための活動が急務となっている。本活動は、県内に散在し、天災によって失われてしまう生物標本の一時保管場所を整備し、その存在を示すとともに、高知県に県立自然史博物館が必要であることを広く発信することを目的とする。              |
|      | 京都ほたるネットワーク<br>鋸屋 慎三           | 50万円<br>京都府   | <b>京都市内のホテルが飛ぶ水辺環境保全・整備活動</b><br>京都ほたるネットワークは市内10河川においてホテルが飛ぶ水辺環境保全活動を行っている。近年の気象変動の激しい中、京都の街なかでホテルが飛ぶことは奇跡に近い。河川清掃・水辺環境整備・ホテル飛遊観測・地域へのホテル鑑賞会の案内と実施・ホテルが飛ぶ水辺環境教育などを通して、地域住民と子どもたちがホテルと人間が共存できる環境への意識を高め、共にこの環境を整え維持継続することが目的である。川の水が命の源になっているホテルを観察することで、水のありがたさ、自然の大切さを伝えたい。ホテルが飛びかう環境は人にも豊かな環境である、その指標となるホテルの存続が危機に瀕している今、次世代に継承していく意義ある活動である。           |
|      | 越後松之山「森の学校」キョロロ友の会<br>村山 暁     | 49.9万円<br>新潟県 | <b>モリアオガエルの池復活作戦:博物館と友の会協働による里山の水辺生態系保全</b><br>十日町市立博物館であるキョロロの周辺は、美しい棚田景観で知られ、「にほんの里100選」や環境省の「重要里地里山」にも選定された、生物多様性保全上重要な里山である。本活動は、キョロロの自然観察イベントの場として活用され、来館者に親しまれてきたため池(通称「モリアオガエルの池」)において、アメリカザリガニの影響で急減した水草群落を再生し、水辺の生物多様性を回復することを目的とする。特に、希少水草であるフトヒルムシロとイヌタヌキモの再生を目標とし、博物館と市民の協働による保全活動と定量的モニタリングを実施する。成果は展示や地域活動に活用し、地域に根差した持続的な環境保全活動のモデルづくりを目指す。 |
|      | 特定非営利活動法人<br>棚田LOVES<br>永菅 千鶴子 | 50万円<br>兵庫県   | <b>放棄棚田の再生による水環境の回復と生物多様性保全事業</b><br>本事業は、荒廃が進む棚田の再生と保全を通じて、水環境の回復と生物多様性の向上、さらには地域文化の継承を図るとともに、次世代の担い手を育成することを目的とする。具体的には、田植えや稲刈り、生物観察などの体験型プログラムを実施し、子どもや若者、企業、地域住民が継続的に関わる仕組みを構築する。また、棚田が持つ水源涵養機能や水質浄化機能、多様な生態系の保全価値への理解を深めることで、環境保全意識と具体的な行動変容を促進する。これにより、「単発参加」から「関わり続ける担い手」への転換を生み出し、持続可能な地域の資源と人のつながりが循環し、自然と暮らしが支え合う社会の実現を目指す。                      |
|      | 針江おうえん隊<br>三輪 泰生               | 42.1万円<br>滋賀県 | <b>針江暮らしの創造プロジェクト</b><br>滋賀県高島市針江地区は、生水(しょうず)を生活の中で循環的に使う伝統的な河端(かばた)システムが地域の環境を守ってきた。針江地区には、国内外から見学者が多く訪れ、重要文化的景観に選定(2010年)されるなど、その価値が認められている。一方で、針江地区の高齢化率は約40%であり、共同作業への参加者減少により水草が水路で詰まり、農道が冠水するなどの問題も起きており、持続的な農村機能の維持に向けて地域資源の維持・管理に向けた活動を見直す必要がある。そこで本活動では①大学生など地域外の人々を含めた資源管理活動、②持続的な地域資源の維持・管理に向けて地域住民に議論を促すことを目的に活動を実施する。                         |

|      |        |   |   |
|------|--------|---|---|
| 研究の部 | 樽澤 優芽子 | 50万円<br>岐阜県<br>長野県<br>岩手県<br>広島県<br>兵庫県 | <b>シカ類の環境適応史解明による現生ニホンジカの侵入リスク予測精度向上</b><br>ニホンジカの分布拡大は日本の森林保護や自然環境保全の喫緊の課題となっている。分布拡大を食い止めるためには、侵入リスクの高い地域やシカ集団を特定することが重要である。しかし、従来の分布予測モデルでは日本列島全体で画一のシカ集団を想定しており、新しい環境への広がりやすさ・広がりにくさの地域集団間の差異は加味されてこなかった。そこで本研究では、DNA情報と安定同位体情報を用いて過去から現在にかけてのシカ類の環境適応史を明らかにすることで、将来的に予測される環境に対するニホンジカ集団の適応可能性を調べる。これにより集団ごとの侵入リスクを高精度に予測し、効率的な個体群管理に貢献することを目的とする。    |
|      | 木下 豪太  | 50万円<br>北海道                             | <b>野幌丘陵で接近する外来・在来テン2種の雪上足跡DNA解析による生息詳細調査</b><br>北海道では本州由来の国内外来種ニホンテンが急速に分布拡大し、在来種クロテンの分布が急速に縮小している。現在、石狩低地帯の西端に位置する「野幌丘陵」が最も両種の分布が接近する地域であり、約2km範囲内に分布境界線が形成されていると見られる。本研究では野幌丘陵にて、テンの野外で最も見つけやすい生息の痕跡である雪上足跡を探索し、雪上足跡からの環境DNAを解析することで、両種の判別と遺伝的集団構造の把握を行う。それにより、分布境界の最前線における生息実態を個体の行動圏スケールで解明し、両種の分布変化と種間競争のメカニズムを探る。さらに、新たなDNA判別ツールを開発し、生息調査の効率化を実現する。 |
|      | 山崎 理正  | 50万円<br>京都府                             | <b>サクラ・モモを加害するクビアカツヤカミキリの誘引捕殺</b><br>侵入害虫クビアカツヤカミキリは、バラ科樹木を寄主とする。日本ではサクラやモモに穿孔することで注目され、特定外来生物に指定されている。2024年には京都府でも被害が確認された。この害虫の防除は、バラ科樹木を保護する上で喫緊の課題である。クビアカツヤカミキリが寄主であるバラ科樹木をどうやって検出しているのか、申請者は樹冠に注目した。幹に穿孔する虫だが、樹冠は幹よりも体積が大きい。バラ科樹木に特有の樹冠からの揮発性物質が寄主探索に利用できれば適応的である。本研究の目的は、バラ科樹木の葉からの揮発性物質に注目し、樹冠を模したトラップを用いてクビアカツヤカミキリを誘引捕殺することである。                 |
|      | 伊藤 響   | 50万円<br>京都府                             | <b>LED照明は平地のカエル群集をどのように改変するか？</b><br>夜間人工光は、生物多様性に対する深刻な脅威として世界的に注目されている。特に日本のカエル類は、約4割の種で絶滅が危惧されており、その主要な生息地である水田は、都市化に伴う街灯や住宅からの光に常に曝される。多くが暗所に適応し、種多様性の減少が危ぶまれる日本のカエル類において、夜間人工光の影響の解明は急務である。一方、既存研究の多くは個体レベルの行動変化にとどまり、群集レベルで影響を検証した例は皆無である。そこで人工光がカエル種を選別し、群集の種多様性を低下させる「環境フィルター」として機能するという仮説を検証する。これによって、光害対策を盛り込んだ次世代の湿地保全戦略の基盤を提供する。              |
|      | 福山 伊吹  | 50万円<br>沖縄県                             | <b>ヤエヤマカチホヘビの絶滅リスク評価に向けた生態・遺伝情報の統合的解明</b><br>八重山諸島ではヘビ類の知見が乏しく、とりわけヤエヤマカチホヘビは日本で最も記録の少ない爬虫類の一つだが、効果的な保全に不可欠な生態・遺伝情報がほぼ欠如している。さらに、本種は近年レッドリストで絶滅危惧 I B類へ引き上げられ、保全上の緊急性が高まっている。しかし、当地の保全事業はイリオモテヤマネコのような大型種に偏る傾向があり、それらの肉食動物を下支えする本種のような小型で目立たない種は見落とされがちである点が大きな問題である。本研究は、野外調査と形態・遺伝解析を統合し、分布や生態、遺伝的多様性を明らかにすることで、本種の絶滅リスク評価および適切な保全単位の設定に資する科学的基盤を構築する。  |
|      | 助成総額   | 492万円                                   |   |